

# 読書えひめ

愛媛県立図書館報

2 月号 通巻 220 号

## 目次

愛媛県立図書館物語 (3)	…………… (P2)
子ども読書係は「1年生」	…………… (P3)
2005 フラッシュ・バック!	…………… (P4~5)
愛媛県読書グループ連絡協議会だより	…………… (P5)
愛媛県立図書館 70 周年記念事業	
「作文・エッセー、読書感想文 募集」	
入選者一覧、作品紹介	…………… (P6~8)

## 進化論の周辺で

愛媛県立図書館長 窪田 利定

現代生物学の基礎とされるダーウィンの進化論が発表されて約 150 年経つが、今その周辺が騒がしい。

昨年末の報道によると、アメリカ合衆国の科学誌『サイエンス』は、昨年の科学界のトップニュースに「進化研究」を選んだという。また、合衆国内では、学校で進化論を教えることの是非について長い論争が続いている。

この論争は裁判所に持ち込まれ、ペンシルベニア州の連邦地裁で判決が出され、人間が「人知を超えた力」によってつくられたとする考え方は、聖書の「創造説」に根ざした宗教的見解であるとし、公立学校で教えるのは、政教分離の原則を定めた憲法に違反するとして禁止したということである。

ダーウィンは、21 世紀になっても論争が続くことなど予想もしなかったであろうが、その著書『種の起源』の中で、「最も強いものが生き残るのではない。最も変化に敏感なものが生き残る。」という趣旨のことを述べている。

図書館に「進化論」なる体系的な理論があるということはあまり聞かないが、図書館に「進化」が必要ということは分かるような気がする。

今、社会は変わり目の時期を迎えている。図書館を取り巻く環境も大きく変化している。市町村合併が急速に進み、県・市町ともに行財政改革が大きな課題になっている。図書館もこのような変化に対し、敏感に変化していくことが求められている。

県立図書館の今年度を、「進化」という視点で振り返ってみるとどうなるか。「進化」をどういう尺度で測るかにもよるが、当館の重点目標の一つ「子どもの読書推進」に照らして考えてみたい。当館ではブックトークやお話し会を県下各地で行わせていただいたが、これは実演と研修をセットにしたもので、子ども読書に関心を持つ個人やグループの人たち、

学校の先生たちにスキルアップの機会を提供することを意図したものであった。こうした試みが参加者に受け入れられるのかどうか不安もあったが、参加者の反応は想像以上で、子ども読書活動への熱意と図書館への期待に背中を押される思いがした。

このような図書館サービスのパートナーからそのニーズを直接聴くことによって、図書館の中からは見えていなかったものが見え始めたと感じている。この小さな変化を「進化」へつなげていきたいと思う。

当館では、子ども読書の振興を通して子育て支援を行い、協力図書で長期大量貸出によっていろいろな世代の人たちの生涯学習を支援してきた。また、

郷土資料の中には、明治期に作成された畝順帳のように、土地境界確認の参考資料として、現在も広く利用されているものがある。

こうした既存の図書資料の提供に加えて、行政機関や企業・専門機関などから、地域の情報を集めて提供すれば、それらを利活用する人によって新しい知識や情報が、すなわち新しい価値が生まみ出されてゆくことになると思う。

当館は 147 万県民の知的要求の伴走者である。当館には 58 万冊の情報・知恵・知識が収蔵されており、インターネットを通して蔵書を検索していただいた人は、2 年あまりで 20 万人に達している。しかし、まだ多くの人にはこんな身近に情報・知恵・知識の泉がわいていることに気づいていただけていない。館内には、利活用のときを待っている資料が多く眠っている。

当館は「進化」に向けて小さな一歩を踏み出したばかりであるが、着実に歩を重ね、県民一人一人の本棚として利活用され、役に立つような図書館に「進化」したいと願っている。

参考文献

『朝日新聞』2005 年 12 月 22 日・31 日付

## 愛媛県立図書館物語 (3)

昨年は愛媛県立図書館が設立されて70周年、現在の愛媛県教育文化会館に移転してから30周年を迎えました。愛媛県立図書館の歴史を振り返るこのシリーズ、最終回は人物辺として、愛媛県立図書館に在籍した館長の中から五人を紹介したいと思います。



つぐぐち えつじろう  
**露口 悦次郎** (1867 ~ 1953)

愛媛県教育会(注)図書館初代館長。明治36年(1903)7月から同40年(1907)3月まで在任。日本文庫協会が主催した日本初の図書館講習会を受講し、書籍の購入や施設の整備など図書館開館に向けて尽力し、図書館の基礎を築きました。後に伊予鉄道の重役に転じ、昭和10年(1935)の愛媛県立図書館新設の際には工事監督として建築の一切を任せられました(「愛媛県立図書館物語(1)」『読書えひめ』218号参照)。



あまの ぎいちろう  
**天野 義一郎** (1867 ~ 1929)

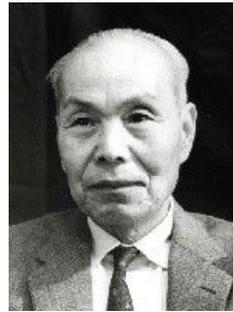
教育会図書館第7代館長。大正12年(1923)9月館長就任、昭和4年(1929)12月に館長在職のまま死去。図書館開館の際には、教育会社会部門長として関わっていました。

その業績は「拮据<sup>きつぎよ</sup>勉勵<sup>べんれい</sup>周旋<sup>しゅうせん</sup>よく務めて時勢に応じた改善を加えつつ遂に其後の盛運を見るに至らしめた」と評価され、具体的には、閲覧所・書庫の改造、児童閲覧室の新設、司書の採用などを行いました。



かん きくたろう  
**菅 菊太郎** (1875 ~ 1950)

県立図書館第7代館長。昭和17年(1942)3月から同23年(1948)5月まで在任。県立図書館史上初の専任館長(それまでは県学務課長や社会教育課長が兼務)。県立図書館には同15年(1940)から嘱託として所属し、主に俳諧文庫の整備に従事していました。館長に就任してからは、戦前は読書指導に力を注ぎました。戦後は進駐軍により図書館が接收されたため、その一日も早い解除を進駐軍や県などに働きかけ、図書館の



再興に苦心しました。

みやけ ちよし  
**三宅 千代二** (1900 ~ 1983)

県立図書館第10代館長。昭和28年(1953)10月から同35年(1960)3月まで在任。昭和12年(1937)4月に波止浜図書館司書より県立図書館に転入し、はじめ書記、その後司書として長く県立図書館の運営の中心として活躍しました。県立図書館では、司書から図書館長となった唯一の人物です。県下の図書館網整備を目指し、また、郷土資料の収集保存・研究に尽力しました。



おち みちとし  
**越智 通敏** (1915 ~ 2002)

県立図書館第14代館長。昭和44年(1969)4月から同51年(1976)3月まで在任。在任7年は史上最長。昭和50年(1975)の図書館移転に際し、新たに文書館的機能を持たせ、県内の古文書の受入・整理を行いました。また、虚子文庫の俳諧文庫への編入を実現させたり、愛媛文化双書を創設し郷土に関する多数の出版物を刊行したりするなど、図書館を郷土研究の一大センターとして大きく発展させました。

(注)当初は愛媛教育協会、大正14年(1925)に改称。本文では愛媛県教育会に統一しています。

(図書整理係 天野奈緒也)

### 主な参考文献

『愛媛県史 人物』愛媛県  
露口悦次郎「県立図書館建築に就いて」『社友』昭和10年7月号  
『愛媛県教育会五十年史』愛媛県教育会  
郡司良夫「三宅千代二の図書館活動について」『図書館情報学の創造的再構築』勉誠出版株式会社  
高須賀康生「越智通敏先生のご逝去を悼む」『伊予史談』328号 平成15年1月号

## 子ども読書係は「1年生」

「こーんにーちはー、松山から来たん？」

中筋小学校(西予市)の1、2年生の元気な声に迎えられ、私たち「子ども読書係」のブックトークの活動は始まりました。ブックトークでの楽しそうな顔、顔、顔! その後、のぞいた給食時間には「自分はこんなに食べたよ」と自慢したり、育てている蚕の幼虫を手の平に乗せてくれたりと大歓迎。「また来てねー」と弾ける声に、私たちはとても良いスタートを切ることができたと感激したのです。

子ども読書係は平成 17 年 4 月新設されました。それまで図書館内でのサービスを中心としていた業務から一転、ブックトーク、恐竜講演会、恐竜おはなし会、中学校では初の試みとなるブックトーク&メディカルトークなど、多岐にわたり、その活動範囲も越智郡上島町から南宇和郡愛南町まで広がりました。このような活動を進めていくうちに、子どもの読書活動推進に関する研修の依頼を受けたり、「おはなし会を実施するために講師を紹介してほしい」といったご要望もたくさん寄せられるようになってきました。

私たち子ども読書係の、この1年の一番の成果と言えば、ズバリ!「たくさんの出会いでたくさんの子どもたちの声を聞くことができた」ことです。ブックトークで訪問した小学校の子どもたちからは、「楽しかった」「本を読みたい」という感想をたくさんいただきましたし、かわいらしいお手紙やお絵かきも送っていただきました。



子どもたちから届いた手紙

夏休みに開催した講演会「恐竜のことをいろいろ考えてみる日」では、恐竜研究の第一人者である国立科学博物館の真鍋 真氏と意見を交わす子どもたちのイキイキとした表情やあふれる笑顔を目の当たりにして、実現に尽力した私たちの喜びもひとしおでした。真鍋氏は特に子どもたちへの働きかけを大事にされており、秋には「真鍋博士とテレビ電話で恐竜のことを話そう!」という企画にもご協力いただき、上島町と保内町の子どもたちと交流されま

した。テレビ電話という媒体越しですが、どの子どもも積極的に真剣に質問し、食い入るように先生の話聞いていました。その姿に触れ、子どもたちが興味を持って何かに出会う機会を作り、それを読書へとつなげていくことこそ、私たちの大きな務めであると実感しました。

その思いは、県立松山西中学校で開催した「命」をテーマにしたブックトーク&メディカルトーク(県立医療技術大学図書館との共催)で更に深まりました。県立医療技術大学教授であり、小児医療の現場で長年活躍された村井静子先生の、体験に基づいた「命」をめぐる実話に、会場からは男女を問わずすすり泣きが聞こえました。160名の中学3年生の真摯さ、感性の豊かさを感じられ、私たちもその姿に深く胸を打たれました。



ブックトーク&メディカルトーク

子どもたちとの出会いとともに、この1年は、県内各地の子どもたちのために読書活動推進に熱心に取り組まれている方との出会いがたくさんありました。そして、図書館や書店のない環境にあっても、「子どもたちに本を」と行動されている先生やボランティアの方々のご苦労なども知りました。

私たちは、この1年の体験を通して様々なことを学びましたが、その中で特に、子ども読書活動推進のために、県全域に対して実際に役立つ事業を実施することの必要性を、そして、今後の県立図書館の活動への大きな期待を強く感じました。

その第一歩として、ブックトーク実践ガイドブックの作成、ブックトークで使用する本やそのシナリオをセットにしたキットの作成及び貸出しのための準備を、現在進めているところです。

私たち子ども読書係はまだ「1年生」。本物の1年生たちの声に支えられ励まされて、この1年を頑張り通すことができたといっても過言ではありません。4月からは少し成長した2年生になって、二人三脚で県内を駆け巡りますので、どうぞよろしく!!

(子ども読書係 吉見 八重、東 智子)

